会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和3年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」  （２）教職員の資質能力向上の推進①効果的な教育成果②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第5回ICT活用研修WG |
| 開催日時 | 令和4年2月24日（木）　16時00分～18時00分 |
| 場所 | オンライン開催 |
| 出席者 | 事業責任者：高岡　信吾  委　　　員：上里　政光、猪俣　昇、岡村　慎一、菊池 裕生、岩﨑 千鶴、  長瀬　あゆみ、合田　美子、中田　明子 計9名  請負業者：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　　　　計1名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計8名 |
| 議題等 | 1. 今年度の総括（猪俣）   ・資料に基づいて下記について説明  　(1)ICT活用WGの計画について  (2)研修プログラム開発のための調査（令和２年度の振り返り）  　(3)令和３年度 実証講座について  　　　① 実証講座  　　　② 実施後のアンケート結果  (4)令和４年度の取組みについて   1. 研修プログラム実施結果報告（猪俣）   ・アンケート結果では、オンラインとオフラインでの違いはあるが、どちらが優位という反応は特に無かった。オフラインで実施した京都の会が研修としての盛り上がったと感じた。  ・一方でそれぞれ研修に臨む考え方に差があったことがアンケート結果より分かった。  ・事前課題の動画教材については、負担だったという意見が多かった。負担を軽くするためには、研修を短時間で複数回実施の検討が必要。  ・自由記述については後ほど確認いただきたい。  ・事後課題については、時期的なこともあり可能な方のみとしているが、岡山での参加者の方には何名か提出いただいている。   1. 2022年度に向けた取り組み（猪俣）   ・資料に基づいて下記について説明   1. 事前課題 2. 対面研修 3. 事後課題 4. 運営準備面   【意見等】  ・オンラインと対面でのアンケート結果にあまり違いはなかったが、主催者側としてはどうか。（高岡）  →オンラインでは、手間や回線環境によって、対面よりも時間を多く設けたため、より受講生の状況に応じた対応ができたと考えている。進行上では問題はなかったが、コミュニケーションの研修なので、対面のほうがやりやすい。（中田）  →対面の長さについては、京都はちょうど良いが、オンラインの岡山・新潟は長いとなっている。このことから盛り上がり方に差があったと見られるがどうか。（高岡）  →やはりテンポ良く進めるには対面が適していると考えている。また、実際に体を動かして行う演習をオンラインではできないためカットしている。その演習を実施するためにも対面が効果的だと考えている。（中田）  ・アンケートの取り方として改善要望などの記述は取れているか。（高岡）  →そのような建設的なご意見をいただいている先生もいる。時間が少なく深い議論ができなかった、グループワークのチーム構成、ケーススタディの資料についてさらに細かい設定が欲しいなどのご意見があった。このような課題について実施後主催者で議論した。（猪俣）  ・今後、オンラインと対面とそれぞれの開発とするのか？それともどちらかに絞るのか。（岡村）  →アンケートからはあまりくみ取れないが、対面開催のほうが場が盛り上がったと感じているので、対面での開発をベースにしたいと考えている。上記用を見てオフラインの開発も検討したい。（猪俣）  ・オンラインと対面でプログラムが変わったのか。（高岡）  →オンラインでは内容を削減した。講師の運営の仕方は両者で変えている。またオンラインではサポートスタッフが必要になる。（猪俣）  ・アンケート結果に研修の目的が伝わっていなかったと思われるコメントがあり、趣旨説明が十分ではなかったのではないかと感じている。（高岡）  ・シラバスを見て、現状では前半と後半が繋がっていないように感じた。可能であれば、前半と後半を入れ替えると統合されるのではないかと考える。また、参加者の困りごとを引き出して事例との関連性を作れると良い。事前学習については対面研修で持ち込めるような課題を出されると良い。（合田）  →先生方が抱えている困りごとを事前に伺い、ICTを活用した方法、コミュニケーションを活用した方法での対応を提案など、前半と後半を統合した内容に変更するように検討をしている。回答に関してのフィードバックの時間がないので悩ましいと感じている。（中田）  ・事前学習がインプットだけでは負担に感じられてしまうので、研修に期待感を抱かせるような事前学習にできるともっと魅力的になるのではないか。京都では後半の研修に高評価だったが、アダプティブラーニングとしてエビデンスのデータとどう結びつけるのか、その部分が弱いと感じた。（岡村）  ・アンケート以外で参加した方からの意見があったか。（猪俣）  →岡山では学科責任者で話を聞いた。責任者レベルなので中田先生の話はそのやり方を伝える方法も勉強できたという話があった。ただ動機づけができずに研修に臨んだのでアンケート結果につながっていないと感じたが、学科責任者レベルではICTの活用が必要だと感じたという意見もあった。（岩﨑）  →導入の部分はどうだったのか。前提やゴール設定が必要。（高岡・岡村）  →本研修の主題として冒頭に石川先生から、最後のまとめでも説明をしたが、伝わっていなかった。（猪俣）  →説明だけではなく参加者自身がチェックできるような仕組みがあると当事者として意味が出てくると感じる。研修の学習成果は、ICTを活用したエビデンス習得方法、その評価方法、その対応法としての教員の関わり方。それぞれの学習評価をどう把握するか。関連性の把握に対する応用的理解。このあたりを、学習目標を提示しておくことは必要。（岡村）  ・事前学習についてはボリュームがあったが、チャプターで区切られていたので負荷なく進められたが、事前学習について講師の方からコメントを頂けると良いと感じた。（長瀬）  ・各会場の温度差があったが、やはり受講に対する姿勢の違いがそこにつながっているのかと感じた。事前学習も見るだけでは意図が伝わらないので、研修前の動機づけがあるとより良い研修になると考えた。（菊地）  →案内の仕方などについても検討していく。またアンケート結果についてもカテゴリー別などさらに解析をしていく。（猪俣）  ・来年度については、本年度の検証を反映してある程度のたたき台を作成し、研修プログラムの完成に向けて研修を開催する。対面・オンライン実施についてもスタートの段階で再度議論したい。（猪俣）   1. 研修プログラムの公開方法について（猪俣）   ・事前学習31本の動画教材をどのように公開するか。一つはYouTubeの限定公開で全専研のHPでリンク案内する方法。こちらのメリットはサーバー費用が掛からない、デメリットは誰が視聴したかなどは分からない。もう一つはLNSで配信しているID講に組み込む方法。メリットは誰が何を視聴したか把握できること、デメリットは事前に受講者の登録が必要なこと。  【意見等】  ・今後このコンテンツをどのように活用していくかによって変わる。サンプルとしていくつかを公開し、興味がある方は連絡をいただくなどすると良いかと考えている。（岡村）  →研修自体がプログラムとして出来上がっていない状態と考えている。今年度はいくつか公開し、実績として全データを文科省に納品する方法で良いのではないか。（飯塚）  →全専研のHPでいくつか公開、実績として全データを納品とする。（猪俣）   1. その他   ・事前学習の動画については文科省の受け入れ態勢を確認し納品方法を検討する。  ・アウトプットについては、教材部分を印刷し配布。カリキュラム・シラバス、事後学習評価シート、アンケート結果、視察のレジュメなどを文科省に納品、HPから公開とする。   1. 意見・感想など   ・事前学習のビデオに関しては様々な場面で活用できる内容なので、この事業だけにとどまらず活用方法を検討していただきたい。また今年度3つの会場で研修を実施したが、導入や内容などの課題について検討されると思うが、研修の実施方法についての検討、また研修の目的については明確化が必要なので、今年度の検証結果をもとに次年度完成版の作成を進めていただきたい。またICTの活用がテーマとなっているので、研修内容1つ1つがどのようにICTと繋がるのか、ICTのツールにしても別のツールの活用を盛り込んでいくか検討していただきたい。（上里）  ・研修の成果を見て、研修プログラムの重要性を感じた。可能であれば来年度も協力していきたい。（菊地）  ・皆さんのご協力をいただきなんとか今年度の責務を果たせたと感じている。まだまだ課題があるので、来年度もご協力をいただきながらプログラムを完成させたい。（中田）  ・ITパスポート対策などを担当しており、ICTを活用して記録をとることで学生の状況を把握できるようになった。実習だけではなく検定対策にも活用できるので、来年度もフィードバックできればと考えている。（長瀬）  ・これからのことを考えるととても大事なテーマだと考えている。来年度はぜひ対面でWGが開催できることを期待している。（高岡）  ・今年度は皆さんのご意見など勉強させていただいた。来年度は積極的に発言し、協力していけたらと考えている。（岩﨑）  ・次年度も活発なご意見をいただきながら研修プログラムの完成に向けてご協力いただきたい。（上里）  ・歯がゆい1年間だったというのが率直な感想で、調査ではいろいろな画期的な事例があったが活用することができなかったが、夏以降、全専研の会員校の他、専門学校に限らず大学、短大からアクティブラーニングの研修依頼が増えており、非常に励みになっている。今後も研修の実施方法などいろいろな思いを巡らせているので、来年もご協力をお願いしたい。（猪俣）  ・実証が3講座できたというのは、主催者の皆さんの粘り強い取り組みのおかげだと感じている。三菱総研の文科省委託事業の委員会でも、研修のこれからが非常に重要で、来年度以降充実を図っていくという中で、研修を全国で公平に実施されることが大切だと提言をしている。ICTは日々進化しているので、どのツールを使って学生の情報を取り入れいるのか、それに対しての必要なアプローチ、そこに教員がどのように関わっていくのか、紐づけできるようなベストプラクティスを提案していけるとヒントになるのかなと考えている。今までになかったような事例を調査で収集できるのではないかと感じている。ぜひその辺をアップグレードできたらと考えている。（岡村）  ・来年度は今年以上に予算が厳しくなることを想定しているが、目的を確認しながら適切な教育プログラムが完成すると良いと考えている。現在GIGA構想が始まったり令和7年以降専修学校教育も大きく変わることが想定される。国内外含めて情報を提供していけたらと考えている。（飯塚）  ・皆さんのご協力でここまでこれたと実感し感謝している。研修プログラムについては来年しっかり仕上げていきたい。ICTの環境が変わっていく中で取り組む内容も変化させる必要がある可能性もあり、アダプティブラーニングとICTの活用をどのように結びつけるのか大きなチャレンジだと考えている。引き続き皆さんのご協力をお願いしたい。（猪俣） |
| 配布資料 | ・全専研\_2021年度成果報告用 （研修プログラム）\_ICT活用WG  ・2022年度に向けた取り組み\_20220224  ・集計\_20220213 |

以上